

月刊

いじろのとも

第四卷

九月号

人類を頼む真言

人類の

あしたを頼む

真言は

人の心を

感じるころ

人として

人のころを

思いやる

誰のころも

感じるころ

手を差し伸べる

業の

闇の中で

苦しむ

人々よ

手は

差し伸べられている

ヨーガという手が

差し伸べられている

ほんの少しの

忍耐で

その手を

つかもつ

苦しみが

喜びに

変わっていくから

生きがいを感じたい人は

八、ライフスタイルを持つとう。

ライフスタイルとは、聞き慣れない言葉だと思いが、ここでは、その人の生き方を表す言葉として使っています。ですから、表題は、生き方を持つとう、ということになります。

生き方を持つ、というのは大げさに聞こえますが、要は自分が何を念じて生きているか、ということなのです。詩人の坂村真民さんは、「念ずれば花ひらく」という言葉を自らの「真言」とし、人さまにも広めておられます。この言葉は、真民さんのお母さんがいつも口になされていた言葉だったようです。私も、とてもいい言葉だと思います。

この言葉のように、人間は常に何かを念じていなければなりませんし、実際に念じているものです。

念ずる内容は、人さまがまだと思います。

最近の私たちの研究によりますと、人間の生き方の型には、大きく三つあることが明らかになりました。名利・欲望追求型と、趣味的活動希求型と、社会生活尊重型です。簡単に紹介しておきます。退屈になつては

いけませんので、自分には、どの型が一番合うか考えながら読んで頂ければ、と思います。

まず第一に、「名利・欲望追求型」ですが、これには二つのサブタイプ（下位型）があります。一つは、ただ今日の命を永らえたいというものから、毎日おいしい食事をしたい、異性にもてたい、お金持ちになりたい、といった自分の欲望の満足を念じるものです。もう一つは、人に認められる人間になりたい、人よりよい成績や業績をあげたい、人より優れた立場に立ちたい、人に命令ができる立場に立ちたい、といった自分の名誉や出世を念ずるものです。

第二に、「趣味的活動希求型」ですが、この型は、美術（絵画・彫刻・陶芸、生け花など）や、音楽（歌、楽器演奏、レコードやCD鑑賞）や、文学（俳句、詩、短歌、小説）などの芸術的活動を楽しみたい、とか趣味で農業や日曜大工を楽しみたい、といった趣味的な活動を追求していききたいと念ずるものです。娯楽活動や余暇活動やスポーツ活動も多くはここに入ると思います。

第三に、「社会生活尊重型」ですが、これには、三つのサブタイプ（下位型）があります。一つ目は、いつか社会的福祉事業をしてみたい、ボランティア活動をしてみたい、いつか社会のために身を捧げたい、といった社

会への貢献を念じるものです。二つ目は、人に思いやりを持てる人になりたい、人の痛みがわかる人になりたい、人の心が感じられる人になりたい、といった他者の心に配慮することを念じるものです。三つ目は、人との約束は尊重したい、与えられた役割は完全に果たしたい、人の期待を裏切りたくない、といった社会の秩序を尊重することを念じるものです。

皆さんは、どのタイプが一番自分に合っておられましたか。

もちろん、誰でもが、これら、サブタイプで言えば六つの型のどれもを多かれ少なかれ願っているものです。ですから、自分はこの型だけを念じているということはありません。どれかをより優先して念じているというに過ぎないのです。

この研究はまだ始まったばかりで、これ以上のことはデータがなく、あまりよく分かっていません。ですからこれから先は、こうあったらいい、あるいはこうあるべきだ、ということについて考えてみたいと思います。

まず、言えることは、若いときは自己を確立するために「名利・欲望追求型」になりやすいのではないかと思います。自分は何程のものかを知るには、自分を試して生きて行かなければなりません。それは、この型と

「趣味的活動希求型」とにおいてです。

また、逆に熟年期に入り、社会の中での活躍が一段落して、悠悠自適の境地になれば、「名利・欲望追求型」から「社会生活尊重型」や「趣味的活動希求型」に変わっていくのではないかと思うのです。

しかし、このことは一般的、平均的に言えることで、もちろん、個人差が極めて大きいと思います。両親ともに、「名利・欲望追求型」であるような家で育てば、自らもそうなつて行つても不思議ではありませんし、そのことは「趣味的活動希求型」や「社会生活尊重型」についても同様に言えることだと思うのです。

ただ、青年期にあるのに「社会生活尊重型」に傾きすぎたり、老年期にあるのに「社会生活尊重型」が現れず、依然として「名利・欲望追求型」でありすぎたりするのは、一般的に言つて問題があるように思われます。

皆さんも自分で反省してみても、自分の年齢にあった型を念じて頂きたいと思います。「趣味的活動希求型」はその年齢でも生きがいとすることが出来ると思います。その年齢でも生きがいとしない限り、それに偏ることは、本当の自分の生きがいへととは、つながっていかないように思えます。他の二つの型のどちらかとのコンビで補助的に追求して頂けたらと思います。

自作詩短歌等選

平等一味とは

人の喜びを
わが喜びとし
人の悲しみを
わが悲しみとする

明けの明星

久しぶり
東の空に
星を見る
新たな感動
今日も感じぬ

自分を防御する権利

人間は
自分を防御する
権利が
法律で
認められている

原子爆弾を
投下する権利も
自宅へ入ってくる人を
撃ち殺す権利も

努力しない人

努力せず
救われないと
あきらめて
日々のくらしに
流されていく

山の厳しさ

山に住む
人の暮らしの
厳しさよ
自然の脅威
すぐそこにある

精神的品位の欠如

精神の
品位欠きたる
人たちが
語るは自己の
欲のこと
すること
食うこと
貶（けな）すこと

二種類の人

冷たく
厳しいだけの人
温かく
優しいだけの人

自然のような澄んだ心

澄んだ空気
澄んだ水
自然は何故
こんなにも
美しいのか
なのに
現代人の
心は
こつも
濁っている
磨いて
磨いて
毎日
磨いて
垢を落とそう

自然のように

澄んだ
美しい
心を
取り戻すために

永遠を生きる

いま
永遠の
一瞬を
生きる

肉は味が強すぎる

肉は
味が強すぎる
他の材料の
味を消してしまう

だから
人を
味音痴にする

人間も
自己主張が
強すぎると
周囲の人を
人音痴にしてしまう

給水だけが楽しみ

マラソンで
入賞が
期待できなくなると
途中の給水だけが
楽しみになるという
人生のマラソンでは
そんなことに
ならないように
しなければ

二つの「こころ」の統合

人間には

人よりすぐれたいところ
人に認められたいところ
人をやっつけたいところ
がある

人間には

人の心を感じるころ
人をおもいやるころ
人に優しくするころ
がある

でも

そして

人間には
これら二つのところを
自分の中で
統合するころ
がある

自作随筆選

アメリカの墮落

いま、アメリカでは、刑務所の収容能力を五割も超えて囚人を収容しているそうです。初め、このニュースを聞いて、私はびっくりしてしまいました。

その原因は、麻薬関係の犯罪の増加傾向によるらしいのです。なるほどそうかと、今度は、原因を聞いて納得しました。

かつて、青少年のアルコール依存が増えていたと聞いたことがありましたが、それが麻薬に移行・発展したのかも知れないのです。

いずれにしてもこの傾向は、社会の病理を現しているものだと思います。それもはっきりとした人々の「心の病」を現すものだと思うのです。

精神病理学では、アルコールや麻薬を含めて薬物への依存は人格障害の一つの指標になります。こうした行動は、「自我・人格」の統制を受けない「情動」の衝動的な行動である「性的な逸脱行動」と、当然深い関連を持っているのです。ですから、アメリカでエイズが感染爆発を起こしているのも、当然と言えば当然のことなのです。

アメリカではヨーロッパの個人主義が一番ひどく行き詰まり、多くの人々が精神的不健康に陥っているように思えます。その証拠は、麻薬犯罪者の増加だけではなく、調べてみなければ分かりませんが、おそらく精神障害、特に神経症や人格障害や分裂病も増加しているのではないかと思うのです。

現在、アメリカほど科学の進んだ国は他にありません。そのことはノーベル賞をもらう人の数を見れば一目瞭然です。でも、その発達した科学によって、こうした人々の心の病は直せないでいます。それどころか、益々増加して行く傾向を、抑えることさえ出来ていません。

人間の心を直接研究する科学である心理学も、この問題の解決には殆ど役に立っていません。先日アメリカ流の社会心理学を信奉する大学の心理学の先生に、役立っていないことを話しましたところ、我々が研究しているお陰で、これぐらいの病理でおさまっているのだと、うそぶかれました。いま自分たちがしている社会心理学が殆ど現実の人間の幸福や福祉の増進に役立たないものだという反省すらないのです。

人間は、生まれた時からどつぷりと泥水につかっていますと、それが、泥水であることにすら、気づかなくなってしまうのです。まして、ほかに清水があるなどとは思っても及ばなくなってしまうのです。

では、その泥水とは具体的には何のことなのでしょう。それは、ヨーロッパに生まれ、アメリカで育った個人主義です。自由の女神に象徴される個人の自由の行き過ぎた尊重です。

「自由競争」によって、アメリカは世界一の経済的、

学問的發展を遂げました。そして、それに伴って世界中に大きな政治的力も持つようになりました。ただ、その自由競争の「自由」はヨーロッパのコーカサシアン人、特にアングロサクソン人の自由に限られていました。二グロイド人やモンゴロイド人の自由は極めて制限されていたのです。最近、形式上は一応、差別が撤廃されましたが、黒人に対する警察官の暴行事件の判決に見られますように、実質は残っているように思います。

いま述べました、過度に自由競争が尊重されますと、人間はお互いが競争相手でしかなくなってしまうのです。それは、人間をお互いに分離・分裂させるように働くのです。

フランスの個人主義を確立したフランス革命は、自由、平等、友愛の三位一体を説きました。しかし、いまや最後の友愛は全くの名ばかりになってしまっています。友愛が真に尊重されれば、人種差別など起こるはずがないのです。これこそが、人間社会を崩壊や分裂から救ってくれるものなのですが、それがないところでは、人間はお互いが疎外されて、心がずさんで行きます。

また、三位一体のもう一つの平等ですが、これは自分を主張する自由と他者を尊重する友愛とを統合するものなのです。ところが、友愛が名ばかりとなっている上に、

この平等も、単に投票権の平等としてしか実現されていません。真に平等であるためには、私とあなたが完全に一体であることを「実感する」ものでなくてはならないのです。このことについては、『こころのとも』第三巻十月号に載せた「自由・平等・友愛」という随筆に詳しく書かれています。

このように、アメリカがどつぱりとつかっている泥水とは、行き過ぎた自由なのです。自由な競争は確かに、経済的効率や学問的業績を高める体制として、優れているかも知れません。しかし、こうした自由の行き過ぎた重視は、エゴの肥大を招き、人間を相互に分離して行きます。人間は人間に支えられて始めて、生きがいを感じることが出来るのですが、そうした人間の本質的な支え合いが出来なくなってしまうのです。

そうなりますと、生きがいを感じる事が出来るのは個人に閉じた、自己の欲望の満足しかなくなってきます。食べる事、飲む事（薬やアルコール）、セックスすること（レズやホモを含む）、スポーツや色々な芸術活動を楽しむこと、などなど、とても刹那的な欲望の満足だけが自己の充実をもたらすようになるのです。

アメリカは、一方では高い経済的・学問的パフォーマンスを誇ると同時に、他方では墮落した欲望追求の下劣

な文化をも生み出しています。

墮落の兆候は、これまで述べてきた、麻薬やアルコールへの依存の蔓延やエイズの感染爆発だけではありません。それは、同性愛の公認、離婚や単身の常態化と父母間の子ども争奪合戦、子どものペット化と幼児虐待、いかがわしい宗教の流行、強姦の日常化、暗殺の横行、暴動の頻発、性行動の規範の混乱と享樂化、凶悪犯罪の日常化と警察検挙率の低さ、マフィアのようなギャングの横行と公認賭博場の経営、人種差別主義者の容認、スポーツや芸術への異常な熱狂、などにも現れています。

アメリカが、たとえ国際社会で政治的な力を落し、経済的効率を悪化させ、学問的業績を上げられなくなり、スポーツや芸術を弱体化させようと、今の墮落や混乱から解放されるためには、建国以来と続けて来た、個人の自由だけを尊重する個人主義哲学を基本的に放棄しなければなりません。

前述のフランス革命の理念に即して言えば、代替の道は、三位一体のバランスをとって、自分の自由を制限しても、人が人に対してもっと友愛を持つように奨励し、平等を実感するような修行の大切さを説き、子どもの時からそれを実習させて行く、そうしたところにしか存在しないように、私には思われるのです。

釈尊のことば（一五）

法句經解説

第五章 愚かな人

（六〇）眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い。

現代は、釈尊の時代に比べれば、比較にならないほど科学が進歩し、夜でも明るい照明があり、テレビは深夜まで、ラジオは一晚中放送を流し、大都會では不夜城と思えるような歓楽街が夜明けまでにぎわっています。

でも、夜と昼が交互に繰り返すことは、釈尊の時代も現代も変わりません。そして、人間は一日に、個人差はあっても、大体八時間は眠らなければならないことも、また不変です。

そして、現代でも大多数の人は、夜の間に八時間の睡眠を取り、昼間は働いています。ですから、夜眠れない人には、夜は長いのです。たとえば、本を読み、ラジオを

聞き、テレビやビデオを見て過ごしても、あるいは、歓楽街で夜通し遊んでみても、夜は長いのです。もしもそんなことをして夜を過ごしたとしたら、今度は逆に、昼間、眠気をもよおしたり、頭がぼうつとしたりする悩みや、仕事をしないで睡眠を取らなければならない悩みが起こってきます。ですから、そういう人には、結局、釈尊の時代と同様に夜は長く、苦しみながら過ごさなければならぬのです。

また、現代は交通手段が発達して、航空機、船、汽車、自動車、単車、自転車など、様々な乗物があり、道路、港、空港、駅、タクシー、などが整備されて、歩くことは殆どなくなりました。ですから、疲れたとき一里（約四キロメートル）の道を歩くことも殆どありません。それが、どんな体験なのかわからない、若い人も多いと思います。

私は、最近、道路が決壊したお蔭（？）で、車で家まで帰れなくなり、急な坂道を十数分歩かねばならなくなりました。夜遅く疲れて車で帰宅し、本や買物などがたくさんあるとき、不通の所から、それらを背負って歩く山道はとても大変です。たった五百メートル位でしょうが、それでも「しんどいなあ」と思ってしまう。昔は肉体労働が多かった訳で、体がぐたくたくに疲れて、

一里歩くのは、本当に苦しく、長く感じられたことだと思えます。

このように、「正しい真理を知らない愚かな者ども」にとつて、人生における生から死への道のりは、ひどく苦しく、長く感じられるものなのです。徳川家康が言いましたように、「人生は重荷を負って遠き道を行くが如し」なのです。

では、「正しい真理」とは何なのでしょう。私は、それは、「生かされて生きる喜びを感じる」世界があることを知ることだ、と思っと思っています。それも「あたま」で知るだけではなく、「こころ」と「からだ」で知らなければなりません。

人間は、一方では、自分が自分の意志で主体的に生きているのですが、他方では、しかし、それが自分一人だけ出来ている訳ではないのです。自分以外のあらゆる存在のお蔭を受けて、出来ているのです。物質、生命、精神（人間）のお蔭を受けているのです。人間について言いますと、先祖、親、兄弟、子、孫、連れ合い、友人、先生、同僚、仲間、その他、社会の多くの人たちのお蔭を受けているのです。

そして、自分以外の存在のお蔭を受けているということとは、ひいては、あらゆる存在を存在せしめているもの

それは、私たち存在を超越したもの（神・仏）ですが、そういうもののお蔭を受けていることになるのです。

これが人間が「生かされて、生きている」と言えるゆえんです。自分の意志で「生きている」と多くの人は、傲慢にも、思っっていますが、そうではありません。そうした人は、あらゆる存在、つまり神・仏のお蔭を受けて「生かされている」ことを忘れているのです。仏教的に言いますと、無明の闇の中にいるのです。

そうした、闇の中を歩いていますと、どれほど、どちらに歩いたかは分かりません。真の人生の目的が見えて来ないのです。それは、家康が言うように、重荷を負って、苦しみながら、果てし無い道を歩いていくようなものなのです。

人間は、自分一人が生きているのではなく、神・仏を始めあらゆる存在によって生かされていることを、「あたま」だけではなく、「からだ」と「こころ」で知るとき、毎日が楽しくて、充実したものになって来るのです。そうなりますと、今日一日を生き、今日一日を死んで行くことを実感することが出来ます。それは、これまで何万年も生きてきた命をそのまま今日生きていると感じる世界なのです。明日の命を思い煩うことはありません。いつ死んでも、死ぬまで毎日が楽しいのです。不満はど

ここにもありません。無限の命、無限の光に満たされていくのです。自分のために生きる命はもうどこにもありません。ただ、神・仏のおぼしめしのままに、その現れである、あらゆる存在のために、人さまのために、生きて行くだけなのです。

(六一) 旅に出て、もしも自分よりすぐれた者が、または自分にひとしい者に出会わなかったら、むしろきっぱりと独りで行け。愚かな者を道伴(つ)れにしてはならぬ。

ここで「旅に出て」と言っているのは、本当の旅行も入るかも知れませんが、これは、むしろ比喩で「人生における旅」のことを言っていると思えます。

では、人生の道づれとは何のことなのでしょう。すぐ思い浮かぶのは、結婚相手ということになると思えます。でも、一夫一婦制の下での結婚相手だとすれば、誰かがすぐれた人と結婚しますと、誰かは劣った人と結婚しなければならなくなります。ですから、この偈のような条件が満たされるためには、皆が皆、自分と等しい人と結婚しなければならぬということになります。でも、それは現実問題として不可能です。

ですから、人生の別の旅を考えなければなりません。それは、おそらく、自分の人生の生き方を求める旅、つまり求道の旅のことを言っているのではないかと思われまます。ですから、この偈は、自分の生き方を探そうとするときに、自分と等しいかそれ以上の人を道づれにすべきことを言っているのではないかと思います。

今は、自分の生き方を真剣に求めようとする人は、そんなに多くないように思えます。科学技術に支えられて、忙しいが、楽で、快適な生活に流されて、うとうとと暮らしているように思えます。何か不幸な、自分の思いどおりにならないことが起こった時だけ、生きている意味を考えてみるようです。ですから、この偈は、現代の多くの人にはピンとこないのではないかと思います。

でも、ぼつぼつこの科学万能の価値観から脱する時が来ています。病気になるれば、医者が薬や手術で科学的に治してくれる。生活は科学のお蔭でどんどん便利になって行く。本当に科学は有り難いものだ。そんな考えを捨てる時が来ているのではないかと思えます。いま、地球は滅亡へ向かって突進しています。環境だけではなく、人の心がすさみ、心が貧しくなっていくことが、大きな原因であることに、殆どの人は気づきません。聖人たちを自分の人生の道連れにしようではありませんか。

後記

- 一、この度、ご縁がありまして、ここ山城町国政から同じ徳島県の勝浦町に引っ越すことになりました。ここから真東に車でなら三時間ほど行ったところですが、人口は似たようなものですが、同町にはお寺が十三ヶ寺あるそうです。その中には有名な四国霊場二十番札所の鶴林寺があります。信仰のあつい所のようにです。
- 二、私のご縁を頂きましたのは、同町の星谷にある星谷寺所属の「星の岩屋」という修験の修行寺です。四国霊場十九番札所立江寺の奥の院ということになっていきます。でも、今は殆ど修行する人はありませんし、お参りする人も少ないようです。
- 三、その寺は標高三百メートル足らずの所にある山寺です。巨大な岩と、そののなす洞窟と、滝と、紅葉が調和していて、とても雰囲気のある行場です。最近、車の通れる道路が寺の下まで開通しましたが、寺へは車では上がれません。駐車場もまだ出来ていません。どうなるか未定です。早く出来たらいいのにと念じています。
- 四、庫裏は古く、一部改築し、窓や玄関にアルミサッシをはめて頂きました。二階が十八畳あり、まるまる空いています。かなり多くの人が泊まれると思います。
- 五、私が、ここ山城町でお祭りしています仏さまは、勝

浦町でも同様に心光寺と名付けて、庫裏の離れにお祭りさせて頂くようになりました。なお、この寺の本堂には十一面観音さんが、また大師堂には弘法大師さまが、それぞれお祭りしてあります。

六、この星の岩屋から勤務する大学までは、車で約一時間十分ぐらいです。通えますので、いずれ障害児・者をお預かりして、共に修行して行きたいと思っています。

七、なお、引っ越しは、今月下旬ごろに行います。でも、道路が不通ですので、取り敢えずのものだけです。

八、山城町では多くの方にお世話になりました。誌面をお借りしてお礼を申し上げます。

月刊 こころのとも 第四巻 九月号 (通巻 四十五号)	平成五年九月八日 〒779 53 徳島県三好郡山城町国政八三四 ひびきのさと(清心者寺院)心光寺 (沙門)中塚 善成 <small>ぜんせい</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 清心者寺院 心光寺 口座番号 徳島9 53708	